

轉如絡絲喚起の事後に見ゆ、其外益都方物記に、一名翠碧鳥ともいひ、事物異名に饒舌郎といふも、能く諸鳥の眞似をする故なり、文同が詩に、就中百舌最無謂、滿口學盡衆鳥聲、自無一語出於己、徒爾嘲音誇縱橫といふも、其眞似を惡みてなり、王維が聽百舌鳥詩に、入春解作千般、語拂曙能先百鳥啼、唐詩紀事に見ゆ、然るを和名抄に、鴟の一名伯勞とし、百舌鳥とする、鶯の一名黃伯勞、古昔よりの誤を承け傳へ、枕草子に鶯の關と書きたるを、季吟の春曙抄に、百舌鳥陵と注せしは、次第に誤り來れり、鴟は爾雅に云、鶉鴟郭注に、俗呼爲癡鳥といへるもの、鄭滌が草木略に、按此似鸚鵡無冠而長尾、多在山寺厨檻間、今謂之鳥鴟、とはなり、此鳥の癖として、最初の發聲に何となく諸鳥の眞似をする中に、うぐひすの眞似を能くする故に、彼此と誤りきたれり、

〔本朝食鑑六林禽、鴟訓毛須〕

集解、鴟本草綱目不言形色、凡鴟似鳩而小、頭背至尾皂色帶赤似驢色、顏氣眼容類小鶉、眼邊黑眼上白條引頰、背黑而末曲亦如鶉、頰臆白腹黃赤有黑橫紋、鶉青羽黑脛掌黑赤、爪利而硬、每摯小鳥而食、其聲高喧不好、故俗爲惡聲、夏鳴冬止、在野則結草磔蟲、歌人呼稱鴟之草莖、古談謂昔有狡童淫人之侍婢、然未知女之居、故指鴟之草莖爲證、欲行、又有鴟與杜鵑相約之事、俱未知其眞也、近世野人以野草莖上磔蛙蝨之類、稱鴟之草莖、此亦不知何故矣、今官家之兒畜之、韝上、比鷹以摯小鳥作弄戲耳、或有食鴟者、曰味苦有臊氣、常人尙未食之也、

肉氣味苦平無毒、主治小兒魘病、

〔本朝食鑑六華和異同、鴟〕

李時珍舉九說而論之、惟以郭璞之說爲準、郭註爾雅曰、鴟似鶉鶉而大、鶉鶉者百舌也、爾雅謂鶉鴟之醜、其飛也颺、斂足竦翅也、旣以鶉鴟並稱、而今之苦鳥、大如鳩黑色、以四月鳴、其鳴曰苦苦、又曰姑惡人多惡之、必大按此數言與本邦之鴟形色殊背未詳、或曰鴟者本邦之鶉鳥也、鴟四五月鳴、鶉秋末鳴春